



毛利家家臣の墓群
参道に通じる山手斜面に広がる墓碑群。郷土文化研究会の調査で約300基の墓石が確認された



大内義隆主従の墓
本堂裏の山腹(遊仙窟)に祀られている。十三世・異雪禅師の計らいで、行水・白装束で法話を聴いた時、追っ手は既に寺を囲んでいたという



十六羅漢
境内に配置された羅漢像。制作年は定かではないが延宝5(1677)年頃と思われる



かぶと掛け岩
池に顔を映す際、脱いだかぶとを掛けたとされる岩



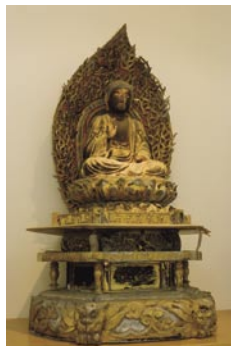
姿見の池
大内義隆公が自らの顔を映して最後を悟ったとされる池



お手伝いをいただいた山口曹青の大庭俊洞師(左)と大寧寺徒弟の山口周和師

盤石橋

本堂に通じる第一の橋。自然石を組み合わせた造りで山口県三奇橋の一つとされる。寛文8(1688)年の架橋



薬師如来像(歴史資料館「虎溪殿」内)



開山、石屋真梁禅師(「開山堂」内)

歴史的見どころの多い境内には、大内義隆が自らの顔を映して最後を悟ったと云われる「姿見の池」や、その時かぶとを掛けたとされる「かぶと掛け岩」が残り、また本堂に通じる第一の橋「盤石橋」は山口県三奇橋の一つにも数えられ、造形美だけではない。

大寧寺の境内には、約三百基もの墓碑が点在する。この地で命を絶つた大内義隆はじめ家臣の墓の他、毛利家家臣の分骨墓、上杉憲実の墓もある。足利学校や金沢文庫の再興で知られる関東管領上杉憲実が政争に疲れ出家、この地に辿り着いたのは享徳元(二四五七)年。四世・竹居禅師の弟子となり、寛正七(一四六六)年にこの寺で亡くなった。他にも萩藩家臣やその妻の墓などが多数あり、これらの調査・研究は現在も続けられている。

た取り組みが懸命に進められている。豊川稲荷も勸請祭祀された見どころの多い境内

秋には紅葉、春には桜が咲き誇る境内には訪れる人が絶えないが、新緑の六月もひと際美しい景色が楽しめるという。

く建築史上でも高く評価されている。そして、大寧寺を語る上でもう一つ外してならないのが「長門豊川稲荷」である。幕末の文久三(一八六三)年、朝廷との対立から都を追われた七人の公卿の一人、三条実美卿を保護したのが四十五世・實運泰成禅師であった。その後、明治維新後の兵制改革に抵抗した「長州諸隊の乱」を擁護したことから亡命し、豊川の妙厳寺に身を寄せることとなった實運禅師が、当時の神仏分離政策から豊川稲荷を守ろうと救済を求めた政府要人の中に三条卿と多くの長州人がいたのである。このお蔭で危機を救われ、その奇縁から大寧寺に分霊を祀ることとなった。



長門豊川稲荷禅宮。右は参道の千本のぼり

